【グループワーク（Aグループ）】

（コーディネーター 伊藤 氏）

・今回から参加される委員もいるので、改めて自己紹介から始めたいと思います。前回から今

にかけて感じていることも話してほしい。

（委員１）

・子どもをスキー教室に通わせているので、先週の日曜日に新嵐山に行ったが、結構にぎわっていた。

前回、１階レストランが話題になっていたが、新たなテナントが出店していたし、レストランのメニューも変わっていた。めむろ野菜スタンドという新しい企画があったり、自分としては楽しかった。

（委員２）

・町内の清水鹿追寄りで酪農を営んでいる。

・スキーなどアウトドアはしないので、新嵐山は遠い存在になっている。これまで宿舎でのイベント（宴会）などで利用したことはある。

（委員３）

・青葉町西に住んでいる。

・コロナ以前は、主婦の友達とランチを楽しむために利用していた。今は価格も高くなっている

ので利用していない。昨シーズンからシーズン券を購入したので、冬は年間10回程度スキー

に通っている。今シーズンは、先週初めてスキーに訪れた。30ｃｍほどの降雪しかなかったが

　圧雪はまあまあ良かった。一番多く通っているのは新嵐山のスキー場である。

別のスキー場では、以前（若い頃）仕事終わりにスキーをしながら、お風呂に入っていたが、新嵐山のお風呂は寂しいと思っている。

（委員４）

・スカイパーク（国民宿舎）ができる前から利用していた。

（委員５）

・祥栄で農家を営んでいる。

・新嵐山の関わりとしては現在ワイナリーを経営している。小さい頃から小中学校のスキー学習

　など頻繁に通っていた。大人になってからは、別のスキー場での指導員としてスキーを教えて

いたが、子どもたちは新嵐山に通っていた。

・私たち町民もどんなモノに価値があって、どんなモノが美味しいのか、この場所は本当に魅力があるのか、他の地域と比較してそれ以上の価値が創造できているのかを他と比べてみないといけない。

・リフトの架け替えが迫っている中で、我々にできることは何か。単にお金をかけるのではなく、合理的にお客さまを運び、サホロやトマムやニセコにはない満足度を得るためには何をすべきか、この小さな山で考えていかなければならない。

　新嵐山は帯広から非常に近いところにあるので、レッスンしたり、仕事終わりに来るという点では、十勝管内では優れている。自分たちが使い切ったり、他地域と比較しながらアイデアを持ち込まないと上手くいかないと思っている。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・前回、スキー場のリフト改修が話題になったが、すでに改修期を迎えており、2基を架け替え

すると7憶かかる。

・今回のグループワーク前半では、収支状況をしっかり把握しながら議論をしていきたい。

資料にある数値をすべて把握するのは難しいと思うので、第21期（令和3年度）の収支状況

　で確認したい。新嵐山スカイパークの運営は指定管理者制度を導入している。指定管理とは、

責任は芽室町（行政）が持っているが、実際の運営は民間が行っているもので、特徴としては

運営にあたり、イベント実施やレストランなど具体的な手法といったところの自由度を高く

している。新嵐山に関しては、単年度契約ではなく、複数年度（3年）という行政契約手法

の一つである。

直近（令和3年度）の数字では、スキー場を切り出すと黒字になっている。他の年度は赤字で

あることから、営業努力も含めて黒字化している。ただし、指定管理は運営会社の営業利益・

営業努力だけでやっているものではなく、共通部門に計上されている指定管理料（＝税金）と

して町が支出している。

各年度を見てもらうとわかるが、ご想像のとおり、コロナによって来場者が減っていることで

赤字部分が増え、指定管理料が増加していることが読み取れると思います。これについては、

コロナによる特殊性と判断するには、今年度の状況が見えてくると理解できるが、今年度の

状況はいかがか。

（町担当者）

・令和2、3年度については、コロナによる利用控えが要因となり、特に宿泊、宴会が含まれる

宿舎部門が大きな売上減となっている。

今年度については、資料「事務事業の成果に関する説明」に記載のとおり、宿泊に関しては、11月末時点でピーク時の6～7割程度まで回復している。なお、資料には記載していないが、スキー場に関しては、昨年より約2.5倍の乗降客数で推移している。

・付帯事業として、めむろ野菜スタンドという新たな企画も始めており、芽室野菜に拘りながら、町民の皆さんに応援していただけるような地元に特化した取組み（メムピ―ソフト、アップルミートパイ、中島モーモー牛乳など）も進めている。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・指定管理者の営業分析など、これらの資料を見ての感想や不明な点があれば発言してほしい。

（委員６）

・リフト乗降客数が年々減少している中で令和3年度に利益を上げることができた要因は何か。

（町担当者）

・経費削減に関しては、効率的に降雪できる気温で限られた時間帯での集中稼働というゲレンデ

整備業務の見直しが大きな要因である。

・収入に関しては、スキー、スノーボード以外の雪遊びが楽しめるアクティビティのレンタルの

　充実などが収入増につながっていると認識している。

（委員４）

・指定管理料など、今後も町として税金を投入していく考えなのか。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・町としては、新嵐山活用計画の見直しを進める考えであるが、現時点では、外からも人に来て

もらおうという方針を打ち出しているが、どれだけの税金を投入するかは決まっている訳で

はない。この会議体だけでなく、議会など他のところでも議論されるものであり、この場では

制約は設けず、「スキーリフトは7憶円かけてもやるべきだ」「やっぱり自分たちの税金だから

少し考えよう」というような話し合いができればと考えている。

（委員４）

・例えば、スキーリフトの更新に7億円かかるとした場合、補助金など財源の見通しは立てれているのか。

（町担当者）

・補助金としては、totoの助成金（上限3,000万円）がある。他には交付税措置される有利な起債（借金）という手段も想定しているが、現時点では、Toto以外の補助金は無い。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・色々な自治体で補助金が貰えるなら実施するという考えで進めているところがあるが、上手くいっていないと思っている。補助金は未来永劫もらえる訳ではないので、町として本当にお金をかけてでもその事業を実施するのが良いのかを議論し、その後に財源を考えるべきである。

（委員２）

・資料を見ると、赤字であるが、意外とお金を生み出している場所ということがわかった。これであれば未来は暗くないと感じた。自分の子どもが小学生になればスキーで使うと思うのでリフトの更新にお金がかかるとしても、町にスキー場があるということは強みになると思うので前向きに進めていく考えを打ち出していけたらと思っている。

（委員３）

・リフトは更新してほしいと思っている。古さは感じるが、大きなスキー場にあるフード付きのようなものは必要ないと思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・リフトの一本化など更新内容についての意見をいただきたい。

（委員５）

・リフトを高速化したり、シートの数を多くすることで搬送能力は上がると思うが、1本化することで困るのは、初心者がなだらかなCコースを利用するには、山頂から急勾配が続く部分を滑らなければならないので難しいと思う。多少ゲレンデを削ってもいいので、頂上から牧道を活用してCコースに流すのが良いのではないか。林間コースのように幅広にすれば子どもも楽しめ、距離も伸びると思う。私はやり方次第で1本にしても良いと思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・町として、いまのような方法など、どこまで検討を進めているのか。

（町担当者）

・リフトを一本化した場合の一番のネガティブは、第1リフトまでの移動距離である。加えて、ご意見のあった山頂の急勾配と捉えている。実は来年度山頂からCゲレンデに流すため、作業を進め、トライアルにより利用状況を確認する考えである。ただし、この作業を行っても第1リフトまでの移動距離は解決されないので、課題解決に向けた方策として、第1リフトの位置を変更することも検討するが、まず以て、初心者が頂上から牧道を通って、Cゲレンデを滑走することができるかトライアルで検証したい。

（委員７）

・スノーボードでスキー場を利用することが多いが、主にナイター利用なので、リフトにフードが付いているといいなとか高速が良いとか要望はあるが、何よりも魅力は、これからも利用者のことを考えて、町がコースを新たに変更しようとする「変化」である。利用者にとっての良い変化とか一本化にしたらどうかという議論が行われていることが一番であり、滑っている人にとっても良いと思う。このような計画を聞いて、私はやっぱり来たくなった。周りの人にも伝えたいという気持ちになるので良いと思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・営業分析を見ると、スキー場が一番収益を生み出す機能になっていると考えられる。

（委員３）

・昨シーズン、オープン当初は初心者が滑れるコースレイアウトになっていなかった。事故などのリスクを踏まえると、利益が出たからと言って手放しで喜べないと感じている。

（町担当者）

・昨シーズンは、気温が下がらず、これまでに経験したことのないくらい、雪づくりに苦労した。そのため、第2リフトまでの最短距離でのコースレイアウトによりオープンすることとなり、急な勾配で初心者の皆さんは非常に困ったと思います。早く開けてほしいというニーズに応えるため、あのようなコースレイアウトとなったものであります。なお、今シーズンは第2リフト頂上から緩やかな弧を描き、第2リフトへ向かう例年通りのコースレイアウトになっています。

（委員６）

・スキー場に向かう送迎バスとすれ違うが、今シーズンは学生などですごく混み合っている様子であった。特に、学生が来やすい環境づくりも大事であると感じた。

（町担当者）

・昨シーズンから高校生などの学生利用が増えている。加えて、道具を持たず、レンタルを利用するケースが増えている。学生利用の増加は、無料送迎バスも理由の一つ（魅力）と分析している。

（委員８）

・自衛隊の利用はどうなっているか。

（町担当者）

・主に平日利用が多い。各部隊単位で利用されており、団体扱いしている。

（委員９）

・ファミリー単位で考えた場合、値段が高くなると家族連れでは行きにくくなると思われるが、その部分に対するケアを考える必要もあるのではないか。

　この町に住んでいるからこそ、町民割が使えるなどの方策も必要ではないか。

（町担当者）

・町民限定の町民還元については、これまでもご意見を頂いているが、観光拠点としては、稼ぐ場所と考えており、青少年の健全育成や福祉の観点であれば、各々の予算（教育費・福祉費）で計上すべきと考えている。担当としては、観光拠点として「在り続けること」が町民還元と考えている。現在赤字ではあるが、将来的に利益が出れば指定管理者の販売促進の一環として行うべきものと考えている。

なお、担当としては、町民利用を増やすための手段として、町民還元は有効な方策のひとつと捉えているが、結果としてその部分に税金投入することになるので、町民の意見（声）が必要になってくると思っている。

（委員９）

・ギアを購入するよりレンタルする方が良いというニーズが増えているように感じている。実際にレンタル事業の状況はどうか。

（町担当者）

・レンタル事業は指定管理者の自主事業につき、金額については明確にできませんが、先ほどの学生が来やすい環境づくりにも関連するが、通常価格より安い設定のレンタル＋リフト券のセット販売は指定管理事業者が行っている。

（委員５）

・リフトを動かせば電気料がかかる。リフトに人が乗っていなくても人件費はかかる。そのため

　理想は全てのシートに人が乗っていること。しかし、人が並びすぎると通常のスキーヤーは敬遠する。顧客満足度の観点では、新嵐山のスキー場に利便性やコストが安過ぎてリフト待ちが長くなることは求めていないのでその点も考えなければならない。

・町民還元については、予算をどこの組織から捻出するかを新嵐山担当だけでなく、各々の組織で検討すべきというアプローチをすることは良い考えである。ただし、町民からすれば、どこの予算で見ても良いのでは…という話になると思うが、行政サービスにはお金がかかるので顧客満足度を上げながら、頂いた税金で更に満足度を上げることが、これからの行政の役割と思っており、稼げる行政を目指すのであれば必要な考えである。

・レンタルが多くなったのは、最新モデルが借りられるようになったからだと思う。

・新嵐山は市内から近いが、他のスキー場（サホロ・トマム・ニセコ）と比較すると魅力は劣る。山の標高が低く、雪が少ないので独特の魅力、違う魅力を創造しなければならない。

（委員１０）

・自分はスキーをしないが、気になっているのは、資料「事務事業の成果に関する説明」で確認すると、スキーの乗降客数が年々減っているが、この点をどう分析しているのか。

　今回の資料では、スキー場は稼げる部門になるかもしれないが、このまま乗降客数が減少する可能性もあるなら再検討しなければと不安に思った。

（町担当者）

・リフト乗降客数の減少は、新嵐山のみならず、全てのスキー場の共通課題である。数字的には平成30年度の年間37万人程度を目指せば、安定的な経営ができると思っている。そのために

休眠中のスキーヤーや新規スキーヤーなどを取り込むとともに、北海道経済産業局と連携しSKI TO CAMP［スキー×キャンプ］というスキーを滑って、すぐグランピングができる、北海道初の事業を行う予定であり、首都圏からフォロワーが何十万人もいるインフルエンサーに来てもらい、魅力を発信してもらうなど、小規模スキー場が事業を継続するために、独自性を出した、他にはない特化した取り組みを進める考えである。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・仮に、リフト改修など大規模改修をしようとする際、投資した額を回収するための収益分岐点の算出やそのために必要な来場者数などの試算は行っているのか。

（町担当者）

・試算については行っていない。活用計画では、リフトを統合するか、現状維持かを検討するとしており、皆さんにご議論いただきたいと考えている。それを踏まえ、方向性が決まれば試算するという流れになる。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・今後、スキー場単体での黒字を目指すのか、スキーを呼び水としてエリア全体で考え、収支を改善していくのか、町としての考えはどうか。

（町担当者）

・スキー場単体での黒字化は可能と思っているが、スキーだけで新嵐山に来てもらうのは難しいと思っている。お風呂の改修やサウナ、スキー×キャンプのような新たな取り組みをしながら宿舎を含めた総合的な取り組み、魅力づくりが必要と考えている。ただし、宿舎に関しては

　税金の投入なくして維持することは難しいと考えており、皆さんのご意見を伺いながら、残すのであれば、町も指定管理料など今後もある程度の税金を充てながら、観光資源の観点からも維持していきたいと思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・伺った理由は、資料からスキー場単体での黒字化は見えてきている。一番の赤字は宿舎業務。数字だけ見るとかなりの金額である。ただし、宿泊機能やお風呂などがあるからスキーに来てくれるのであれば考えていかなければならないので、宿舎に視点を移して、皆さんに聞きたい。

（委員７）

・観光視点で見ると、夏も冬も十勝管内の利用が多い。もっと町民サイドに立って、町民が意見を出しやすい取り組み（例えば、レストランのレシピ募集など）も必要である。町民が関心を持ったり、関わり合いを持てる取り組みを町ができることが新嵐山の強みである。類似施設と違うのは、町が町民の声を拾いつつ、今回の会議のような場を開いて細かくやっていけることこそが魅力と思っている。そうすれば、町民の意識として、楽しく関わっていけると思う。

　そうすることで、町内のスキー利用も広がっていくのではと思うし、宿泊が厳しいのであれば

　地域にもっと愛される場所にしていくことが大事と思う。

（委員６）

・現状では、町民の利用率は低い。町民からレストランの価格が高いという声が上がっているがアンケート調査はレストランの満足度が非常に高い。町民が高いからと言って、それを変えることは事実に基づく検討ではない。こうしてレストランを変えていきながら満足度が高いということは、そこを高めていかなくてはいけない。それよりも町民の意識改革が必要である。

　町民のための新嵐山という感覚が町民にはあるので、観光に力を注いでいるので町民が行きにくくなったという感覚ではなく、観光地としてもっと魅力を高めるにはどうしたら良いかという感覚になれば良いと思う。町民が町民のための施設という意識が強すぎることが、最近の変化に対する不満につながっていると思うので、今回のアンケート調査による傾向なども発信しながら、利用者に満足していただいている施設になってきていることを伝えても良いと思う。例えば、豚汁1杯が500円は、食材に拘っていても、自宅でも食べれるものは、町民からすれば高く感じる。しかし、外から来た人にとっては、払って、食べて、美味しいとなる。

　新嵐山の位置づけをしっかり定め、町民に伝えていくことが大事であると思う。

（委員５）

・レストランのメニューが変わり、価格が改定されて、利用者が相当減るという声があったが、

それは違うという事実がアンケート結果から出ている。

外から来た人が価値を認めてくれて、新嵐山ってすごいということが、町民に波及することが今は大事ではないかと思う。世間の現状や価値を知ることが必要である。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・現状の宿泊施設のままで良いのか。

委員からは親戚が来たら新嵐山に泊めさせたいが、他の観光施設に宿泊させてしまうという発言もある。

　スキーに関しては、皆さんの雰囲気では絶対継続しよう、継続する中でどうやって収益を上げるかという感じである。

　それでは宿泊であるが、料金に見合う室内環境かと言われると厳しいと感じている。

（委員１０）

・ファーストタイマー（初心者）を観光としてメインターゲットにすることは理解するが、観光目的以外でスキーやキャンプをする人が宿泊利用するイメージがつかない。古くからの町民からすると宿泊は外せないものなのか。何かとセットであれば宿泊利用するケースもあると思うが。

（町担当者）

・以前は、宴会とセットで宿泊するケースが多く、町民の利用も多かったと認識している。

　しかしながら、コロナ禍で宴会利用も激減している。

・管内の温泉地と対等に争うのではなく、他にはない特化した取り組みとして、現在行っているインドアとアウトドアの垣根を除く戦略として、グランピングでは、例えば、三世代で宿泊される場合、テントに泊まりたくない高齢者や主婦もいることから、部屋とのセット販売による商品提供なども行っている。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・定員は61名、部屋数が17。事業評価上では、収支分岐点の稼働率が50％でギリギリの状況といわれる中でコロナ禍以前の令和元年度でも稼働率は27％である。これでは厳しいと感じる。

（委員８）

・女性の脱衣場が狭く、浴室は5人も入ると一杯になるという話を姉から聞いたことがある。

（委員９）

・宿泊者が誰なのかを考えた時に、町の事業でワーケーションを実施していたが、都心の方が、非現実的な空間で仕事をすることは非常に良いと思った。その時に自分も宿泊したが、部屋に対する不満よりも快適性という点でどうなのか。やはり、あの老朽化はちょっとまずいと感じた。そのような方々を受け入れるには改善が必要と感じた。また、そのような方を受け入れるにして現状の部屋数が合っているのかという部分も考える必要があるし、それらに適応するワークスペースのような空間も必要であり、快適性をアピールすることが重要ではないか。

温泉地は温泉が目的で行くものであり、無いものを求めるよりも、違う目線でのアプローチ、時間を過ごす空間としての機能をもっと活かすべきではないか。また、観光地としての目線では、自然を利用したアトラクション的な部分は大きなお金をかけなくても既存施設にプラスアルファでも十分使えるのではないか。新嵐山はそのような環境を活かせる立地条件にあると思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・出張で大阪に行った時に宿泊したホテルでデイユースを行っていた。結構使えると思う。

（町担当者）

・昨シーズンの冬からデイユースを行っている。施設内が非常に混雑するので、特に、遠方からのゲストが荷物置きや休憩場所として利用されるケースがある。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・仮に、宿舎を無くすという選択肢はあるのか。あり得るかどうかという観点で伺いたい。

（委員９）

・可能性もあるので、個人的には無くすのは勿体ない。

（委員６）

・少ない利用者のために多くの経費をかけるのは非効率的だと思う。活かすとしたら、どういうターゲットにするかをしっかり考え、それに向けた宣伝を行うなど、ターゲットを絞った戦略が必要ではないか。

（委員７）

・経費のことを考えると、思い切って無くしてしまい、もっと強みに向けて特化したものにする方が良いと思った。

（委員１０）

・宿舎には宿泊だけでなく、宴会やお風呂もあるが、無くても良いのではと思う。

（委員３）

・キレイにしつつ、ちょっと使いやすいスペースに変えて使えたら良いと思う。

（委員８）

・住んでいるところからも近いので、無くすのは寂しい感じがする。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・誰をターゲットにすべきか。

・新嵐山を全く知らない東京方面の人が、北海道を旅行しようと思った時に調べるのはじゃらんや楽天と思うが、ここに決めるのはかなりの確率でないと思われる。そうなると口コミや知人から聞いて決めると思う。全然知らない人をターゲットにするより、家族・友人など、また、東京方面よりももっと近いところの方が可能性は高くなるのではないか。

（委員７）

・観光を目指すのであれば、ホテル系に向かうので、町が経営するにはロスが大きすぎると思う。やはり、町民の意見を取り入れ、町民が使いやすいというのが絶対条件だと思う。芽室の山をみんなで使いながら意見を出し合っていければ良い。しかし、それだけでは難しく、転換期であるので、今は外に向けての発信で魅力があることを外に伝えることが大事と思っている。

・新嵐山活用計画を見て、新嵐山はすごいと気づかされた一人なので、存続、あり続けることを目指していけたら良いと思う。

（コーディネーター 伊藤 氏）

・宿泊業を続けていくことでの経費はどうなのか。やめた場合、経費はそれほど変わらないのか。

（町担当）

・一番経費がかかるのは、宿舎である。老朽化が激しいので、燃料効率も悪く、大きなコストがかかっている。その部分を改善するだけでも20％ほどコストが下がると推計している。

・宿舎を存続するという結論になれば、町民が自分の町の宿泊施設に泊まることは、ほぼ無いと思っているので、担当としては、例えば、研修室をコワーキングスペースとして、町民が会議などで日常利用できる取り組みを検討したいと思っており、そのような場を町民に提供することが宿泊施設というより宿舎自体の役割と考えている。

（委員１０）

・十勝管内の人は宿泊するのか。宿泊の大部分は、十勝管外（道内・道外）だと思うので、それに向けて宣伝するのであれば、それなりのコストがかかるので、それを上回る収益が見込めるのかがポイントである。

・出張する人が出張先の宿泊施設を検討する際に、近くにコンビニがないのは選びづらいので、今のままでは厳しいと思う。

［グループワークの振り返り］

（コーディネーター 伊藤 氏）

・宿泊機能について、キャンプもある中でそれ以外にどうやってこの場所の活用法があるのか、様々な意見が出された。

やっぱり無くすのは勿体ない、違う使い方があるのではないか、両面の意見があったと思う。

　宿泊からシフトして、コワーキングスペースやデイユースなど、日帰り的な使い方も出てくる可能性がある。

・スキーに関しては、令和3年度黒字であるが、今後リフトの改修問題が出てくる。

　2基で7億円という試算の中で、選択肢としては、全て更新する、1基に統合する、コースを変更する、7億円の試算自体を再度見直すなどの意見があった。

　令和3年度黒字の理由は、レンタルの充実やゲレンデ造成の効率化である。なお、必ずしも

すべてが良いかは考えなければならない。

　ただし、何かしら変えていく、変化は良いことである。変化の一つとしては、無料バスによる学生（高校生）の利用が増えていることや手ぶらでのレンタル利用が増えていること。それを活用しながら更に広める手段の一つとして、割引の仕組み（学生割、ファミリー割、町民割）の可能性はないか。稼げる行政を目指すのであれば取れるものは取った方が良いという考えや施設として存続すること自体が町民還元であるという考えなども出された。

・レストランに関して、これまで利用されてきた人たちからは、入りずらくなったという意見が出ていたが、アンケート結果は非常に高く、満足しているという事実があるので、最終的にはどこに向かっていくのか。

町民をターゲットにするのか、外の人をターゲットにするのか。

この施設は誰を中心に考えていくのか。町民のためか、町外のためか、その両方を目指すのか。

・最終的には、ここにいる全員が同じ考えになる方が少ないと思うが、そのようなことを考えるために、色々な部分で皆さんに考えて頂いているので、一つの方向性はできれば出したいと思うし、これについては、ある程度の納得感は皆さんに持ってもらえると思っている。

・前日に本別町で勉強会を開催した際、新嵐山スカイパークの印象を聞いたが、一番多かったのはドッグランであった。十勝管内にもドッグランは多いが、丸太やウッドチップなど、犬だけではなく、利用する人にとっても環境が良く、他には無い要素という感想であった。

以上

